

古代エジプトにおける家族埋葬に関する一考察 —新王国時代第18王朝テーベの事例を中心にして—

河合 望

Some Remarks on a Family Burial from the Theban Necropolis
in the Eighteenth Dynasty Egypt

Nozomu KAWAI

近年エジプト学の分野においてもポスト・プロセス考古学や文化人類学の影響を受け、ジェンダーと家族に関する研究が増えつつある。本稿では、古代エジプトの埋葬コンテキストから考古学の立場で古代エジプトの家族における社会的関係に関する考察を試みた。本稿では新王国時代第18王朝中期のネフェルカアイトとその家族の埋葬例を取り上げ、個々の埋葬における副葬品の価値や遺体処理の違いから個人の社会的関係を分析した。その結果、従来度々指摘される副葬品の男女差の違いよりも、むしろ血縁関係や男女に関わらず個人の生前における社会的地位の違いが副葬品の富の差に反映する要因であると考えられる。したがって、古代エジプト社会における性差は一般論として結論づけられるものではなく、むしろ多様であったと思われる。

キーワード：エジプト、第18王朝、ジェンダー、社会的関係、埋葬の考古学

This paper explores the possibilities of reading social relations within a family from Egyptian material culture in funerary contexts. The example is from the family burial of Neferkhau in Thebes dated to the middle of the Eighteenth Dynasty. By comparing each burial assemblage in a family burial, this paper aims to see the difference of wealth and relations within a household in terms of blood ties and sex. The data suggests that there is almost no difference of the wealth of the tomb goods in terms of sex, but that family relations (i.e. blood relations) or the status in society seem to be the strong factors to determine the wealth of burial. Thus, it is not unlikely that the gender relations in Ancient Egyptian society were more varied than was suggested recently.

Key-words : Egypt, Eighteenth Dynasty, Gender, social relations, funerary archaeology

はじめに

エジプトの王朝時代の葬制に関する研究は、従来、墓の建築、壁画、碑文、ミイラ遺体といった資料を中心に扱って考察されており、これまでエジプト学研究の主流を成してきた。いっぽう、埋葬や副葬品のコンテキストから社会階層とその変化を考察した研究は比較的最近のことである (Seidelmayer 1987, 1990; Slater 1974; Richards 1992など)。新王国時代の研究に限って言えば、代表的なものとして S.T. スミス (Smith) が第17、18王朝のテーベの未盗掘墓から出土した副葬品の組成を用いて、いわゆるエリート層における階層差について考察した論考 (Smith 1992)、そしてトロイらによるヌビア・ファアドラス地区の新王国時代の墓地を扱った定量分析がある (Sinclair and Troy 1991)。また筆者も以前、王墓の副葬品の組成から時代ごとの富や埋葬観念の変化を考察したことがある (河合 1994; Kawai 2000)。近年では L. メスケル (Meskell) が同じく

テーベの墓堀り労働者の村ディール・アルニマディーナの岩窟墓の副葬品組成から、18王朝とラメセス朝 (第19、20王朝) の埋葬観念の違いや、ジェンダー¹⁾、個人差の問題 (Meskell 1998, 1999a, 1999b) を論及している²⁾。

メスケルの研究ではディール・アルニマディーナの保存の良好な墓の副葬品を、当時の経済文書から物品の価値を考察した J. ヤンセン (Janssen) の研究 (Janssen 1975) にもとづき、個人の埋葬における副葬品の価値の差から社会階層差の問題だけでなく、ジェンダー、個人史の問題を考察している。メスケルの研究は従来のエジプト学の研究では例外的なものであり、ポスト・プロセス考古学や文化人類学の視点から考察した画期的なものである。このような考察はディール・アルニマディーナの事例に限らず、他の類例も用いて検討される必要があろう。そこで本稿では、メスケルの方法論を手懸りとして、例外的に2世代にわたる世帯単位の埋葬がほぼ未盗掘の状態で検出された第18王朝

のネフェルカアイト (*Nfr-h3yt*) とその家族の墓の埋葬コンテキストから、当時の一家族における社会的関係に関して考察することを目的とする。

考古学とジェンダー、個人

考古学におけるジェンダーの研究は、欧米において1980年代から盛んになり、いわゆるポスト・プロセス考古学の潮流と連動してきた (Gero and Conkey 1991)。このような研究の背景には現代社会における男性優位の状況や男女の性差の規定などを批判するフェミニズム運動がある。社会史の分野では、これまで歴史のなかであまり注目を受けなかった女性を中心とした歴史(女性史)の確立が叫ばれ、歴史上に活躍した女性像や母系社会の研究が注目された。またそれによって、男性中心であった歴史の均衡を是正する試みがなされている。考古学においてもこのような視点からの研究は従来あまり手付かずにされていたため、近年最も盛んな研究分野となっている。M.L.S. ソレンセン (Sorensen)によれば、ジェンダー考古学に有効な考古資料として、埋葬活動、服装(副葬品や図像資料による)そして、工芸品(副葬品)を挙げている(Sorensen 1992: 34)。それに対し、生業や労働の分業などの手懸りとなる居住地からの考古資料では、遺物が男女のどちらに帰属しているのか判断するのは不明瞭であり、ジェンダーを考察するのには比較的難しい。したがって、埋葬資料が性差を考察する上で最も有効な資料と考えられてきた。

考古学における子供とそのジェンダーの展開に関する研究も近年注目を浴びている (Sofaer Derevenski 1997; Meskell 1994; Baker 1997)。J. ソファエル・デレヴェンスキ (Sofaer Derevenski) も指摘するように、「幼時期」が遊びや学習に費やされるというのは西欧的観念であり、実際多くの社会では、幼少時から大人の仕事に従事しているのである。しかしながら、子供の埋葬は概して成人の埋葬の中に埋没してしまい、あまりその様相を呈するがない。また、古代における子供の埋葬は生後間もない嬰児の場合が多く、本人の社会的地位を暗示するというよりはむしろ埋葬した親の地位や子供に対する感情等の要因が反映されており、ジェンダーの問題の資料とするのは難しいと思われる。

1980年代にはジェンダー研究の本流の社会学において、ジェンダーとは単純に「男」と「女」の関係だけでなく、それ以外の複雑な人間関係も考慮されるようになった (Strathern 1988)。我々考古学者が扱う埋葬においてもただ単に男女差の問題だけでなく、複雑な人間関係を想定して考察されなくてはならないのは言うまでもない。そこには被葬者と死者を埋葬する人たちとの関係が想定されるで

あろうし、生前における男女間や親子間の差が常に反映されるとは言い難い。メスケルは、男女の性差だけが個々人の埋葬格差の要因ではなく、エスニシティ、年齢、階層、性的特質といった複雑な要因が副葬品や遺体処理の格差に反映していると主張している (Meskell 1999a)。

エジプト新王国時代の貴族墓の副葬品と個人、家族

以上、近年の考古学におけるジェンダー研究を簡単に要約してみたが、メスケルの研究はより多様性に注目したものと考えられる。ここでは、メスケルの研究を検討しながら、エジプト新王国時代の貴族墓の副葬品から個人や家族についてどのように考察できるのか考えてみたい。

新王国時代のエジプトについては膨大な文字資料が残されているため、当時の副葬品の価格や埋葬の準備の状況をかなり具体的に知ることができる。たとえば、第19王朝ラメセスIII、IV世期のベルリン・オストラカ第12630番には書記アメンナクトがメスという工人から木棺を買うために、牛一頭と交換したとの記述がある (Wente 1990: 162)。また、ナウナクトの遺言書には息子が定められた通りに親の埋葬の準備をする義務が記されている (Cerny 1945)。このように当時においては、埋葬は死者の生前から入念に準備され、副葬品や遺体処置の格差も被葬者の富に比例していたことが推測される。

ところで、副葬品から被葬者の社会的関係を知るには、それらの価値を知る必要がある。

新王国時代の王墓を掘削した労働者の村ディール・アル=マディーナからは数々の経済活動を記したオストラカが出土しており、当時の物品の価格を知ることが可能である。当時は物々交換の経済であったが、村民はデベンという単位を使用していた。経済活動を記したオストラカは、ヤンセンによって体系的に分析されたが (Janssen 1975)、資料の大半が後期ラメセス朝(第20王朝)に偏っているため、本稿で扱う第18王朝の資料のような他の時代の資料の扱いには注意が必要である。そこで、メスケルも指摘しているように、価格はあくまでも目安として認識されるべきであろう。しかしながら、これによって当時の副葬品の価値がほぼわかり、個々人の富の違いを看取することができよう。

メスケルによれば、副葬品の中には生活習慣や個人の信仰を知る手懸りになるものがあるという。特に第18王朝の埋葬における副葬品は生活に関係するものが多く、被葬者の生前の社会的役割や特定の社会・経済レベルでの人間関係を反映するものとあるという。しかしながら、それらの生活に関係する副葬品は被葬者の生前ににおける社会的役割を反映すると同時に、来世における理想的な社会的役割を象徴するものであることも考慮に入れなくてはならない

だろう。たとえば、同時代の貴族墓の壁画には水辺で狩を行なったり、農作業に従事するといった主題が描かれているが、これらは来世における理想的な生活的一面と考えられ、現世での生活を全て反映したものとは断定できない。したがって、これに関しては注意深い考査が必要であろう。

ネフェルカアイトとその家族の墓

ネフェルカアイトとその家族の墓（図1）は1934年から1935年にかけてアメリカのメトロポリタン美術館のエジプト調査隊によってほぼ手付かずの状態で発見された。墓はテーベ西岸クルナ村のアサーフ地区に位置し、後世にできたディール・アル=バハリのトトメスIII世の記念神殿に繋がる参道とラメセスIV世の記念神殿によって隠され、ほとんど盗掘の被害を受けなかった。棺に記された文字によれば、ネフェルカアイトは、「書記」、「宝庫長」、そして、後に女王となる神妻ハトシェプストの「家の文書管理官 (*imy-r mdʒyt m pr Hmt-ntr H3t-špswt*)」という称号を所持していた。このことから恐らく彼は新王国時代第18王朝トトメスII世からトトメスIII世の治世（前1450年頃）にかけての中級官吏であったことがわかる。彼は妻レンネフェル (*Rn-nfr*) と共に同じ部屋に埋葬されたが、後継者で息子の「書記」アメンエムハト (*'Imn-m-h3t*)、長女ルユ (*Rwiw*)、長女の婿と思われるバクアメン（通称バキ）（*B3k-'Imn*）他5人の埋葬も同じシャフトから繋がる部屋で発見されている。墓のシャフトの切り合い関係から判断して、おそらく彼らはトトメスIII世記念神殿の参道の建設直前に埋葬されたことから、墓の年代はトトメスIII世の治世頃と考えられている（Hayes 1935: 18）。

墓は上部構造が無く、シャフトとその東西に穿たれた埋葬室から構成される。ネフェルカアイトとレンネフェルは

西側の部屋に埋葬され、アメンエムハト、ルユ、バクアメンと他5人は入口がやや低い位置にある東側の部屋に埋葬された。それぞれの部屋の入口は日乾レンガで封鎖されていた。西側の部屋は大きく二つに分かれており主人であるネフェルカアイトは最奥の部屋に頭部を南に向かって埋葬されていた（埋葬I）。妻のレンネフェルは主人の棺から約1mほど離れて頭を西に向かって埋葬されていた（埋葬II）。プラン図を見る限りではまずどちらか片方が先に埋葬され、その配偶者の埋葬のために部屋が拡張されたようである。

東側の部屋には長女ルユ（埋葬IV）とその婿とされるバキ（埋葬III）、そしてネフェルカアイトの息子で後継者のアメンエムハト（埋葬V）が部屋の西角に頭部を西に向かって人形の木棺に埋葬されていた。以上が名前の判明した被葬者であり、それぞれ比較的手厚く埋葬されていた。同じ部屋のそれ以外の埋葬は以上のものと比べると見劣りがするものであり、12ヶ月から15ヶ月の嬰児（埋葬VI）、6歳くらいの少年（埋葬VII）、成人の女性（埋葬VIII）、6ヶ月の嬰児（埋葬c IX）、9歳から10歳の少年（埋葬X）が含まれていた。これらの頭位は北向きまたは南向きのいずれかである。少年の埋葬VIIとXには粗末な箱型の木棺が採用され、嬰児は小型の人型木棺に埋葬された（埋葬VI、IX）。また大人の女性はこれらの埋葬の中でも最も大きな箱型木棺に埋葬されたが、元々ネフェルカアイトの棺であったものを再利用したものであり、銘文は泥で覆われていた。

各埋葬に付属する副葬品はほぼ未盗掘の状態で残っていることから、個々の家族の成員に帰属する副葬品組成の違いから富の格差を分析することが可能である。また、これまでメスケルが分析したディール・アル=マディーナの墓の類例とは異なり、2世代の家族埋葬なので、それぞれの家族成員の社会的関係を推測することができよう。

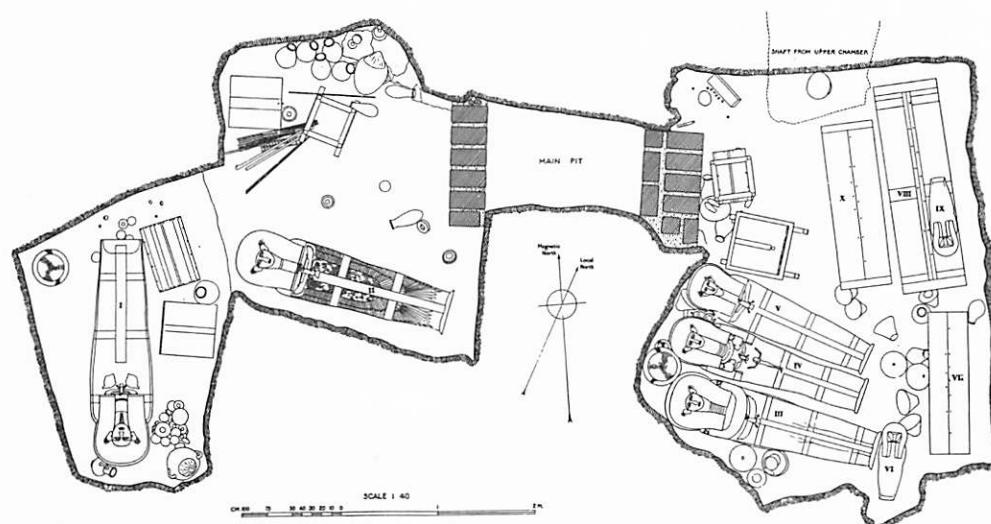


図1 ネフェルカアイトと家族の墓

分析方法

本稿の目的はエジプト新王国時代の家族埋葬から当時的一家族における社会的関係を考察することである。家族成員の富や社会的地位を知るために、それぞれの遺体処理の違いと副葬品の価値を知る必要がある。ミイラ製作においてはヘロドトスが記しているように、富める者は完全にミイラ化されたが、貧しい物は遺体処理が簡略化されたようである。したがって、遺体処置の違いも社会的地位を反映したものと考えられよう。また副葬品の価値に関しては、メスケルが採用したようにヤンセンの物品価値のデータに従い、個々の埋葬の差をわかりやすくするため、副葬品の価値を数値化する。ただし、これはあくまでも便宜的なものであり、絶対的なものではないことを断っておかなくてはならない。ヤンセンのデータは目安であり、実際は一つの副葬品を製作するにも彩色を施すとか、金箔を施すとか、象嵌を入れるというようなことで価値も異なってしまう。したがって、ヤンセンのデータは文字資料の情報を目安にしたWealth Indexとして扱うことにしたい。ただし、幾つかの副葬品の価格は不明なので、それについても?としておいた³⁾。そして、以上の分析で明らかになった遺体処理と副葬品の価値の差から、夫婦、親子間、そしてそれ以外の家族構成員との関係について考える。次に、男女間における副葬品の内容の違い、あるいは死者の生前ににおける社会的役割による副葬品の違いについて考察する。

考察

1. 遺体処理

主要被葬者である、ネフェルカアイト、レンネフェル、バキ、ルユ、アメンエムハトの5人の遺体は通常ミイラ製作で行われるはずの内臓摘出はされておらず、末期王朝時代の埋葬のような簡略化されたミイラ製作によるものである。したがって、内蔵が納められるはずのカノポス容器はネフェルカアイト、レンネフェル、ルユの埋葬でカノポス容器が確認されるが、中身は空であった。それ以外の12ヶ月から15ヶ月の嬰児(埋葬VI)、6歳くらいの少年(埋葬VII)、成人の女性(埋葬VIII)、6ヶ月の嬰児(埋葬IX)、9歳から10歳の少年(埋葬X)はミイラ化された形跡はなく、粗末な布に包まれているだけであった。

2. 副葬品

5人の主要被葬者の遺体を納める木棺は全て人形棺であるが、ある程度の装飾の違いが見分けられる。レンネフェルの棺は最も古い型式でリシ棺と呼ばれるものであり、主に第17王朝から第18王朝初期にかけて流行したものである。ネフェルカアイトとアメンエムハトが納められた白地に塗られた棺はリシ棺の次に主流になった型式であり、第18王朝中葉まで頻繁に採用された。バキとルユの棺は黒色

の下地で、これは第18王朝中葉から第19王朝初期まで流行した型式である。装飾の質では主人ネフェルカアイト、長女ルユ、長男アメンエムハトの木棺において金箔と眼象嵌が施されていることが指摘できる。それに対し、妻レンネフェルと娘婿バキの棺は銘文帯のみである。他の4人の子供と1人の成人女性は粗末な棺に納められていた。嬰児(埋葬VI、IX)の遺体は有名なトゥトアンクアメン(ツタンカーメン)王墓出土のそれと同じように小型の人形木棺に納められ、それ以外の少年は矩形の木棺(埋葬VII、X)、そして成人女性(埋葬VIII)は主人ネフェルカアイトの矩形の棺を再利用したものである。

棺のみを比較すると、主人ネフェルカアイトの血統を引く人物(ルユ、アメンエムハト)は比較的良質の棺に納められ、そうでない人物(妻レンネフェル、娘婿バキ)はそれより劣るものを採用していることが明らかである。特にルユとバキ夫婦の棺装飾の違いから明らかにネフェルカアイトの長女である妻ルユのほうが社会的に優位にあるように思われる。また嬰児、子供の埋葬が粗末なのは埋葬が被葬者の生前における計画にもとづいていたことを裏付けるものであり、予期しない死によって埋葬された子供は来世への準備が不完全なため、比較的粗末な埋葬になってしまうものと考えられる。また主人のものを再利用した木棺に納められた無名の成人女性は、おそらく家の女召使だったと考えられる⁴⁾。

カノポス容器は主人ネフェルカアイト、レンネフェル、そして長女ルユの埋葬からのみ確認される。いずれもカノポス容器櫃と石製あるいは土製のカノポス壺を含んでいるが、なかでも長女ルユのものは側壁四面に四守護女神(イシス、ネフティス、ネイト、セルケト)と象形文字のレリーフ装飾と象嵌が施されており、櫛を備えた立派なものである。すでに述べたように、遺体処理から判断してこれらのカノポス容器は実際に使用されたものではなく、模造品として納められたものである。第三中間期において、恐らく経済的な理由で、遺体からの内臓の摘出はほとんど行われなくなり、カノポス容器の形をした石製模造品が副葬されるが、ネフェルカアイトの墓の例もその前兆と思われる。ここで注目すべきことは2世代目では長女ルユの埋葬のみにカノポス容器が用意され、長男アメンエムハトと長女の娘バキにはカノポス容器が用意されなかったことである。このことも棺同様に長女ルユの社会的優位を示しているようである。

指輪に関しては娘バキ以外の主要被葬者の埋葬に認められる。ネフェルカアイト、レンネフェル、ルユ、アメンエムハトの埋葬で銀製指輪が納められ、レンネフェルのみに金製指輪が認められる。

青銅製の剃刀、毛髪用カーラー、青銅製ナイフは男女を

問わず、全ての主要被葬者の副葬品に認められる。

性差を象徴すると思われる副葬品について考えてみよう。男性の埋葬例では、ネフェルカアイトの副葬品からは弓、矢9本、棍棒3本、棒といった武力を象徴するものと書記の必需品であるインク・チューブが出土している。バキの副葬品からは戦斧、投げ棒が確認される。そして、「書記」アメンエムハトの副葬品には生前の職業を文字どおり暗示するかのように、パピルス用の鉢2つとインク・チューブが認められる。これらの男性特有の副葬品は生前における職業に関係するものとされる (Smith 1992: 208-209)。ネフェルカアイトの副葬品には書記としての役職を示す副葬品だけでなく、多数の武器が出土していることからヘイズは彼が生前に軍人としての役割を兼ねていたことが推測している (Hayes, W. 1935: 32)。しかしながら、前述したようにこれらはむしろ男性役人の埋葬に共通する象徴的な副葬品とも考えられる。ネフェルカアイトの副葬品の中にはハトシェプストの名前を持つ方解石製容器があるが、王家から下賜されたものと考えられよう。

女性の副葬品には通常職業に関する遺物は見当たらない。というのも古代エジプトの女性は一般的に「家の女主人(*nbt-pr*)」であるからである。ただし、女性特有の化粧箱の中には数々の化粧道具が納められた。ネフェルカアイトの妻レンネフェルの副葬品には青銅製鏡、木櫛、象牙ピン、黒檀製棒、方解石製コホル容器、方解石製容器が認められる。同じく、長女ルユの副葬品にも青銅製鏡、木櫛、象牙ピン、黒檀製棒、方解石製小型容器が含まれている。

主要被葬者の副葬品の価値をできるかぎり古代の価値単位デベンに置き換えたところ、表1のようになった。主人ネフェルカアイトの副葬品は合計432デベン、妻レンネフェルの副葬品が合計312.5デベンであった。主人の副葬品の中で価値が明確でなかった武器の価値を含めたとしても、それほど夫婦の副葬品に大きな差があるとは思えない。長女ルユと婿バキの副葬品は前者が432デベンで後者が411デベンである。すなわち、この場合血縁関係のある長女の副葬品の方が、婿のそれよりも価値がやや高いことが明らかである。長男アメンエムハトは相続人であるが価値の不明な副葬品を省いた合計は142デベンであり、価値の不明な副葬品を勘定に入れたとしても、両親や姉のルユと副葬品の価値の差は著しいものであろう。

このような状況の可能性として考えられるのは、長男アメンエムハトが早逝し、長女ルユと養子バキが相続することとなったと推測できるが、決定的な証拠は無い。形質人類学等の鑑定等から被葬者の死亡時の年齢を推測することはできるが、本稿で扱う被葬者の科学的分析はなされていない。ここで少なくとも言えることは長女の副葬品が配偶者や兄弟の副葬品よりも価値が高いことである。

おわりに

本稿ではエジプト新王国時代のテーベ出土の家族墓を例として、古代エジプトにおける一世帯の家族埋葬についてジェンダーや社会的関係の観点から考察してきた。以上の考察で明らかとなったことを最後に要約し、本稿の結論を述べたい。

1) 幼児の埋葬は比較的粗末である。その理由としては古代エジプトの埋葬が被葬者の生前の社会的地位によって決定されるため、社会的地位を得ない子供は親の意思により比較的単純な埋葬になってしまうことが推測された。

2) 成人女性の単純埋葬はおそらく召使の埋葬であると考えられる。遺体は主人の棺を再利用したものが用意され、ミイラ化もされていない。成人であるにも関わらず、主要被葬者との著しい富の違いが看取された。

3) 家族内の主要人物の埋葬では、主人のネフェルカアイトの埋葬と妻レンネフェルの埋葬で、主人の埋葬の方がやや厚葬であるが、それほど大きな差はない。長女であるルユは父親の埋葬とほぼ同価値の副葬品を有しており、配偶者バキの副葬品より豊かである。筆者は、これは血縁関係によるものと考えるが、ここで重要なことは副葬品による男女の性差は常に男性のものほうが厚葬であると断定することはできず、さまざまな多様性が埋葬から推察されるということである。それは、むしろ生前の社会的地位や血縁関係によるものであることが指摘できる。

メスケルは、古代エジプトにおける女性は男性とほぼ同じ地位であるとする伝統的な研究を否定し、ディール・アル=マディーナの埋葬事例から男女の副葬品に明らかな差があるとしている。また、彼女は男女の副葬品の差があまりない埋葬は例外であり、それについては今後の研究が待たれるとしている (Meskell 1998: 37)。しかしながら、ディール・アル=マディーナは王墓の造営に携わった労働者の村であり、男性の職業によって規定された共同体なので、自ずと男女差が明らかなのは当然のことである。このような地域には女神官や貴族層の女性の埋葬は確認することはできない。本稿の家族埋葬の例は中流役人層のものであり、埋葬における男女の差がさほど大きくない。第二世代に関しては女性のほうが副葬品の価値が高いことから、メスケルの言う例外に属するが、すでに指摘したように、副葬品の価値の違いが性差によるものではなく、むしろ社会的関係や血縁関係による結果と想定される。今回の論考は古代エジプト新王国時代の埋葬から看取される性差や社会的関係に関して一般論を提示することは目的としていないが、一つの埋葬例から問題提起をすることができたと考える。今後の課題としては、他の複数の埋葬例を検討し、男女差、社会的関係、血縁関係などの要因をさらに検討していく必要があろう。

表1 ネフェルカアイトの家族墓出土遺物

副葬品	個数	デベン		
埋葬I：ネフェルカアイト（主人）				
白色の装飾付人形木棺（銘文帯・金箔・眼象嵌）（全長227cm）	1	95		
木製カノポス櫃	1	20		
石製カノポス壺	1セット	5		
パピルス（死者の書）	1	60		
心臓スカラベのネックレス	1	36		
銀製指輪	1	？		
ファイアンス製腕輪	4	16		
ファイアンス製足輪	4	16		
青銅製剃刀	1	2		
青銅製毛髪用カーラー	1	4		
青銅製ナイフ	2+	4		
弓	1	？		
矢（青銅製鏃付）	9	？		
青銅製石突き付棍棒	3	？		
棒	1	2		
インク用墨チューブ	1	2		
ゲーム盤（セネット）	1	？		
椅子	1	10		
衣類収納箱	2	50		
牛角製小ケース	1	10		
銘文入り方解石容器（ハトシェプストの名前）	1	15		
ファイアンス製容器	2+	3		
赤色磨研彩文土器	2	2		
アンフォラ（ワイン壺）	2	2		
大型貯蔵用土器	12+	12		
小型貯蔵用土器	3+	3		
土製植木鉢	10+	10		
その他粗製土器	47+	47		
計		432+		
埋葬II：レンネフェル（妻）				
リシ棺（銘文帯）	1	40		
木製カノポス櫃	1	20		
石製カノポス壺	1セット	5		
銀製指輪	1	？		
金製指輪	1	？		
化粧箱	1	25		
スカラベ	7	70		
青銅製鏡	1	12		
木櫃	1+	3		
象牙ピン	1	1		
黒檀製棒	1	1		
方解石製コホル容器	1	2		
方解石製容器	4	70		
青銅製剃刀	1	2		
青銅製毛髪用カーラー	1	4		
青銅製ナイフ	1+	4		
装飾付ファイアンス製皿	3	4.5		
青銅製小型水差し	2	48		
赤色磨研彩文土器	2	2		
計		314+		
埋葬III：バクアメン（通称バキ）（娘婿）				
黒色の装飾付人形木棺（銘文帯）	1	40		
亜麻布の棺覆い	1	50		
パピルス（死者の書他）	3	180		
心臓スカラベのペンダント	1	36		
スカラベ（1個トトメスI世の銘有り）	7	70		
黒檀製コホル容器	1	2		
青銅製剃刀			1	2
青銅製毛髪用カーラー			1	4
青銅製ナイフ			1+	4
砥石			1	0
青銅製戦斧			1	7
投げ棒			1	2
牛角製小ケース			2	10
赤色磨研彩文土器			4	4
計				411
埋葬IV：ルユ（長女：バキの妻）				
黒色の装飾付人形木棺（銘文帯・金箔・眼象嵌）	1	95		
亜麻布の棺覆い			1	50
木製彩色カノポス櫃（レリーフ装飾、象嵌、櫛付）	1	40		
土製カノポス壺			1セット	5
パピルス（死者の書）			1	60
心臓型ネックレス			1	36
銀製指輪				？
スカラベ			5	50
化粧箱			1	25
青銅製鏡			1	20
木櫃			1	1
象牙ピン			1	1
黒檀製棒			2	2
方解石製小型容器			2	20
青銅製剃刀			1	2
青銅製毛髪用カーラー			1	4
青銅製ナイフ			1	4
ゲーム盤（セネット）			1	？
椅子			1	10
装飾付ファイアンス製皿			4	6
赤色磨研彩文土器			2	2
計				432+
埋葬V：アメンエムハト（長男：相続人）「書記」				
白色の装飾付人形木棺（銘文帯・金箔・眼象嵌）（全長205cm）	1	95		
銀製指輪				？
青色ファイアンス製スカラベ形ビーズ	397	？		
コホル容器	5	10		
青銅製剃刀	1	2		
青銅製毛髪用カーラー	1	4		
青銅製ナイフ	1+	4		
珪石製砥石	1	0		
ゲーム盤（セネット）	1	？		
パピルス用青銅製鉄	2	4		
インク用墨入り葦	1	3		
ヘス形容器（埋葬儀礼用）	2	？		
青銅製長頸壺	1	24		
赤色磨研彩文土器	2	2		
計				158+
その他遺物				
箱			3	30
籠			7	7

註

- 1) ジェンダーとは社会学的な性であり、生物学的な性、すなわち「セックス」とは異なる。
- 2) ゲイ・ロビンスはその著「古代エジプトの女性」の中で、次のように述べている。“Unfortunately no systematic study has been made to compare male and female funerary equipment from the point of view of cost, nor to see if there are gender distinction between male and female burials.” (Robins 1993: 168)。メスケルの研究はこのような問題提起に答えるものである。本稿もこのような問題提起に基づいたものである。
- 3) 値値の明らかでない副葬品に関しては資料上の制約があり、今後克服すべき問題である。今後の検討課題としたい。価値の判断できなかった銀製指輪についてはほぼ全ての主要な埋葬に看取されるのでそれほど大きな問題ではないと考える。
- 4) 古代エジプトにおける女性の召使に関しては Robins 1993 : 117-120を参照。

参考文献

- Baker, M. 1997 Invisibility as a symptom of gender categories in archaeology. In J. Moore and E. Scott (eds.) *Invisible People and Processes: writing gender and childhood into European archaeology*, 183-191. Leicester, Leicester University Press.
- Cerny, J. 1945 The will of Naunakhte and related documents. *Journal of Egyptian Archaeology* 31: 29-53.
- Hayes, W. 1935 The Tomb of Neferkhewet and his Family, *Bulletin of the Metropolitan Museum of Art* 30: 17-36.
- Gero, J. M. and M. W. Conkey 1991 *Engendering Archaeology: Women and Prehistory*. Oxford, Basil Blackwell.
- Janssen, J. 1975 *Commodity Prices from the Ramesside Period*. Leiden, Brill.
- Kawai, N. 2000 Development of the Burial Assemblage of the Eighteenth Dynasty Royal Tombs. *Orient* 35: 35-59.
- Meskell, L. 1994 Dying young: the experience of death at Deir el Medina. *Archaeological Review from Cambridge* 13/2: 35-45.
- Meskell, L. 1998 Intimate archaeologies: the case of Kha and Merit. *World Archaeology* 29/3: 363-379.
- Meskell, L. 1999a *Archaeologies of Social Life*. Oxford, Blackwell.
- Meskell, L. 1999b Archaeologies of Life and Death. *American Journal of Archaeology* 103: 181-199.
- Richards, J. 1992 *Mortuary Variability and Social differentiation in Middle Kingdom Egypt*. Unpublished Ph.D. dissertation, Department of Anthropology and Oriental Studies, University of Pennsylvania.
- Robins, G. 1993 *Women in Ancient Egypt*. Cambridge MA, Harvard University Press.
- Seidlemayer, S. 1987 Wirtschaftliche und gesellschaftliche Entwicklung im Übergang vom alten zum mittleren Reich: ein Beitrag zur Archäologie der Gräberfelder der Region Qau-Matmar in der ersten Zwischenzeit. In J. Asmann (ed.), *Problems and Priorities in Egyptian Archaeology*, 175-217. London and New York, Kegan Paul International.
- Seidlemayer, S. 1990 *Gräberfelder aus dem Übergang vom alten zum mittleren Reich*. Heidelberg, Heidelberger Orient verlag.
- Sinclair, P.J. and L. Troy 1991 Counting Gifts to the Dead: A Holistic Approach to the Burial Customs of Lower Nubia using Correspondence analysis. In W.V. Davies (ed.), *Egypt and Africa: Nubia from Prehistory to Islam*, 166-185. London, British Museum Press.
- Slater, R.A. 1974 *The archaeology of Dendereh in the First Intermediate Period*. Unpublished Ph.D. dissertation, Department of Oriental Studies, University of Pennsylvania.
- Smith, S.T. 1992 Intact Tombs of the Seventeenth and Eighteenth Dynasties from Thebes and the New Kingdom Burial System. *MDAIK* 48: 193-231.
- Sofael Derevenski, J. 1997 Engendering children, engendering archaeology. In J. Moore and E. Scott (eds.), *Invisible People and Processes: writing gender and childhood into European archaeology*, 192-202. Leicester, Leicestershire University Press.
- Sorensen, M.L.S. 1992 Gender Archaeology and Scandinavian Bronze Age Studies. *Norwegian Archaeological Review* 25: 31-49.
- Strathern, M. 1988 *The Gender of the Gift: Problem with Women and Problems with Society in Melanesia*. Berkeley, CA, University of California Press.
- Wente, E. 1990 *Letters from Ancient Egypt*. Atlanta, Scholars Press.
- 河合 望 1994 「エジプト新王国時代第18王朝の王墓の副葬品の組成に関する一考察」『エジプト学研究』2号 61-81頁 早稲田大学エジプト学会。

河合 望
駐エジプト、アメリカン・リサーチセンター
Nozomu KAWAI
American Research Center in Egypt
Cairo, EGYPT